

の教官がこうした講義の方法に賛成しているかどうかは断言出来ない。それぞれの講義の内容ならびに性質によってもこうした方法が適切かどうか疑問とされるものもあろうし、一部の教官が好きでやっているという見方も否定出来ないだろう。したがって、こうした方式を全ての講義に適用するというのは現実的ではない。ただ、講義を活性化させるための一つの試みとしては意味あるものと考えている。複数の教官が作り上

げた講義に、無理矢理にでも学生を巻き込み、その結果を評価票という形で検証しつつ次の講義に活かしてゆくという方法は、学生と教官とのコミュニケーションの手段として意味あるものと考えている。今後、提供される講義と同時に評価票の方法をも継続的に検討しながら、より「科学性」の高いコミュニケーションが可能となるよう努める必要があると思われる。

(報告を一部修正して書き直したものである)

旧教養部カリキュラム に対する 学生の意識調査研究

理学部 長谷川 彰
理学部 竹内 照雄
法学部 吉田 和比古

目次

1. はじめに
2. アンケートの概要
3. 総合科目について
4. 学生の理系離れについて
5. ドイツ語教育における諸問題
6. おわりに

1. はじめに

旧教養部では平成3、4、5年度にわたり、「大学設置基準大綱化のもとでの一般教育の方法とその改善に関する基本的調査」のテーマのもとで文部省より「大学教育方法等改善経費」の交付を受け、千葉大学、岡

山大学、長崎大学と共同で調査研究を行いました。新潟大学では自然系と外国語学系がこのプロジェクトを担当し、合計3回のアンケートを実施し、延べ4,000名の学生から回答を得ました。ここでは、新潟大学のアンケートの概略を説明し、その集約結果から浮き彫りにされたいくつかの問題点について考察を試みたいと思います。

実は、このプロジェクトには長い歴史があります。当初は金沢大学と熊本大学も参加して6大学の共同プロジェクトとして昭和51年に発足しましたが、昭和60年以降は4大学共同プロジェクトとなりました。以前の結果については別の機会に適当な方にお話をさせていただくことにし、今回はこの3年間で行了ったアンケートについてお話をさせていただきたいと思えます。2章と3章は長谷川、4章は竹内、5章は吉田が担当します。なお、新潟大学の詳しい調査結果については、文献[1]を、また、4大学の共同研究の詳しい調査結果については文献[2]を参照して下さい。

2. アンケートの概要

まず、アンケートの実施についてですが、教養部の学生は全部で2,000名を越えますので、そのうちなるべく沢山学生が受講している科目ということで、英語とドイツ語の授業を利用してアンケートを実施しました。アンケートの対象となった授業は平成2、3、4年度で行われた教養科目の授業です。1回目は2年次の乙英語、2回目が2年次の乙ドイツ語、3回目は事情があって1年次の甲英語のクラスで行いました。実施時期の違いがそれぞれのアンケートの結果に微妙な

差を生じた可能性があります。1回目は、1年近く前に聴講し終わった講義に対するアンケートですから、講義の印象はいくらか薄れている頃に行われたと言えます。2回目は6月ですから試験が終わってから3カ月の頃に行われましたから、講義の印象は比較的濃い状態かもしれません。3回目は、1年生が現に聴講している授業についてのアンケートであり、しかも試験直前の1月に行われたアンケートなので、前の2回はまた違った意味をもつかも知れません。授業が難しいと答えた割合が比較的多かったのもこのような事情を反映しているのかも知れません。

アンケートでは非常に多くの学生から回答を得ることができました。第1回目は全体の63%、2回目は半分を割り44%、3回目は77%でした。アンケートの項目についてはこれからお話しますが、学生にはマークカードを2枚ずつ配り、それで回答してもらいました。なお、学生には在籍番号を記入してもらいましたが、もちろん、このアンケートの結果はこの調査の目的に限って利用すると断っております。マークカード上のデータは総合情報処理センターの大型計算機を使って数値化し、パーソナルコンピュータに入力します。学生数が多いのでデータ量は莫大なものになりましたが、何とか工夫してデータベースを作り、いろいろな集計ができるようにしました。

アンケート項目は「教養科目全体の状況について」と「各々の教養科目の状況について」に大別されます。全体にわたる問いでは、まず、全体として難しかったかどうか、次に、どの程度であったか、また、履修単位について聞いています。ただし、まだ30単位になる前のことですから54単位で、しかも各系列で必修の枠が決まっていたという背景にご注意いただきたいと思えます。それと、有意義と思った分野はどれかということです。それから、いろいろな学科目について聞いています。難易性に関連して、大学入試センター試験をその科目で受験したか、とか、2次試験で受験したかどうかも聞いています。また、難しい、易しいに限らず、受講して良かったかどうかを聞いています。さらに、難しかったと答えた学生については、困難な理由を聞き、また、その科目をどのような理由から受講したかも聞いています。

詳しくはこれから少しずつご説明いたしますが、全体にわたる難易性に関する質問は、「かなり容易だった」、「容易だった」、「大変だった」、「かなり大変だった」としました。これについての結果は、各年度は大体同じ様な傾向になってますが、「かなり容易だった」は非常に少ない。「容易だった」は大体20%から30%、「大変だった」は50%から70%、「かなり大変だった」も10%位あります。しかし、「大変だった」といっても、各学生がどういう基準で大変だったのか、これは様々であろうかと思えます。教養部時代は遊んで暮らそうとかクラブ活動が目的で入って来た学生にとっては、それこそ大変だったかも知れない。また、本気で勉強しようと思った学生にとってもやはり授業の程度は高く、大変だったのかも知れない。いずれにせよ、学生にはかなりの緊張感を与えていた、と言えるのではないかと思います。

履修単位についての問は、「このままでよい」、「全体として少なすぎる」、「全体として多すぎる」、「もっと自由に履修したい」、「専門科目と連結基礎科目を増やした方がよい」、「外国語の単位を増やした方がよい」となっています。これは4年度までのアンケートですから、54単位で、しかも学群分けもされていることに注意して下さい。それに対して、「このままでよい」が20%弱、「少なすぎる」は殆どない。「多い」と答えた人が20%から40%で、「もっと自由に履修したい」が半分くらいありますが、このような希望はよく理解できるような気がします。また、基礎科目を増やして欲しい、専門科目とか関連する基礎科目を増やして欲しい、という要求がかなり強い。「外国語の単位を増やした方がよい」がまあまあです。このたびの教養教育の改善によって、5、6年度においては、単位数は30単位に減らされ、各系列の必修枠は殆どとり外され、かなり自由に履修できるようになりました。新しい調査を行い、この点に対する学生の意識がどのように変化したかを調べた方がよいと思えます。

次に、教養科目全体の状況について有意義と思った分野についてですが、分野は、人文系列、社会系列、自然系列、既修外国語、未修外国語、体育実技に分類しました。この分野で有意義であったものは複数個書いてもよいという聞き方でした。後程、竹内先生が各

学部毎に分解した結果を説明されますが、これは全体の平均なのであまり特徴が出ておりません。人文、社会、自然と殆ど同じで、大体30~40%です。外国語は大体20%、未修外国語が30%。突出してるのが体育実技で、40%を越えています。これはやはり各学部で分解した結果をご覧いただいた方がよろしいと思います。

各学生の所属が分かっていますから、科目別に難易性を文系と理系に分けて集計してみました。難易度は、「受講して困難を感じた」、「十分理解できた」、「物足りなかった」の3段階です。さらに、「センター試験で受験した」か「2次試験で受験した」か、そして、「この科目を受講してよかった」かどうか、難しい、容易にかかわらず良かったかどうかまで聞いたわけですが、これには人文系、社会系、自然系それに情報科目も加えました。人文系ではやはり「受講困難である」、これは左側の人文系と社会系を文科系、情報を含めて自然系とみて、やはりかなり特徴が違います。傾向パターンが見てお分かりのように違います。つまり、自然系また情報というのは共に「受講が困難」で、文系の方は比較的そこは少し減っている。「十分理解できた」かどうかに関しては、むしろ文系の方が少し高い。「物足りない」は自然系では殆どありません。

試験については省かせていただきます。

「受講してよかった」かどうかを見てみますと、非常に受講困難ではあったけれども「受講してよかった」というのが30%から40%です。「困難」だと答えた学生にその理由を聞いてみますと、「講義の内容ないし技能の程度が高すぎて、理解ないし実行できない」、「受講に要求される基礎知識ないし基礎技能の不足」、例えば「高校で履修しなかった等」がその理由の中に入りますが、「必要であると思ったが、自分の勉強、努力が足りなかった」という反省、「所定単位取得のためやむなく選択したので」いやいやながら受講した。また、「講義内容ないし技能に興味を持てず、勉強する気になれなかった」、などいくつかの理由を設定してありますが、これも人文系と自然系でやはり傾向が少し違います。自然系の方では「程度が高すぎる」が困難の原因の一番大きな理由で、それから「知識不足」と、「高校で履修しなかった」等も入ります。情報科目はまだ普

及してないかも知れませんが、半分以上が「知識不足」です。ただし、自然系では、先程の医学部の先生のお話しにもありましたけれども、高校で特に受講して来なくても分かるような授業を行うように教養部では配慮しておりましたので、その効き目が現れているのかも知れません。自然系と文系で違うのは、「勉強不足である」という自分の努力が足りなかったという反省が自然系と情報については文系に比べれば少ない。「勉強不足」はあまり理由になっておりません。また、「講義内容ないし技能に興味を持てず、勉強する気になれなかった」がやや文系と自然系でちょっと違います。それは後の受講理由にも多分関係ありそうです。理由をご覧いただきたいと思います。

設定した項目は、「専門学部へ行って必要であると思った」、「学部のガイダンスで指定された」、「基礎的な教養ないし技能を身につけるために必要であると思った」、「この科目の内容に関心を持っていた」、「友人、先輩その他の人からのアドバイスを参考にした」、です。人文系と自然系で少しパターンが違います。人文系の大きな特徴は、「内容に関心がある」が1番です。情報もそうです。また、自然系科目を受講する学生は「専門に必要だから」という専門基礎の意識で受講した学生が非常に多い。情報もそうです。それに反して人文系、社会系ではそういう意識で受講している学生は非常に少ない。講義内容がその中心になっています。

先程の「講義内容ないし技能に興味を持てず、勉強する気になれなかった」という理由と合わせて考えてみますと、自然系では基礎として大切だから、レベルは高すぎるかも知れないけども努力をして勉強している。受講困難の理由は自分の努力不足だといって反省する。しかし、必ずしも興味がないわけではない。ところが、人文系では基礎としては考えていないわけで、初め興味本位で受講してみたが、多分、全く新しいことが沢山盛り込まれているので、必ずしも学生が当初予想してたような方向には進まなかった、ことを意味しているのかも知れません。

3. 総合科目について

総合科目は7年度以降の教育改善の目標の一つと

なっていますが、このアンケートを実施した頃開講されていた総合科目は10科目程度でした。これまで私は「数理科学の世界」という総合科目を旧教養部の自然系の先生方と一緒に担当してきました。これはパーソナルコンピュータを補助的に使った授業です。この授業に対する学生側からの評価を知りたくてアンケートの結果を調べました。また、他の総合科目についても、具体的に講義題目をあげて比較をさせていただきたいと思います。なお、授業の内容については、講義概要に書いてある範囲で参考にさせていただきました。

2番目の「水の科学」は旧教養部自然系の先生方が中心となり、工学部、農学部の先生方も参加され、担当教員の数は全部で9名です。聴講した学生は文系が多いようです。責任者によると文系学生に聞かせたいので多数許可したとのこと。3番目の「日本列島の地質とその成り立ち」は旧教養自然系の先生方と理学部の先生方によるもので、長年続いている科目です。アンケートに答えた学生数は58(2年)、38(3年)、127(4年)。これも文系学生の数が多いです。先生の数は6名。4番目の「生物資源論」は20名以上の農学部の先生方が担当され、主として農学部の学生を対象とした授業です。5番目は旧教養部の人文系の先生方が担当された「死生観の変貌と宗教の役割」です。先生方は全部で8名。50名の学生がアンケートに答えてくれています。理系、文系の全体にわたっています。6番目の「叙事詩の世界」は旧教養の人文、語学、それに法学部の先生方9名による授業です。これも5番目と同じで全学部にわたって平均的に聴講されています。7番目の「現代都市論」は旧教養部の社会系と自然系の先生方、それに人文、法学、教育の先生方が担当された授業です。大体7～8名の先生方が担当されました。これも平均的に聴講されています。最後の8番目の「現代マスコミ論」は旧教養部の社会系と情報の先生方が担当されたもので、聴講した学生は文系が圧倒的に多かったものです。

これら8科目について、まず、受講の理由を見ても非常に似ています。ここでは、自然科学の授業のところにはなかった「内容に関心があった」が大きい受講理由となっています。つまり、専門に必要とか

には関係なく、内容に関心があるという理由がピークとなっています。「数理科学の世界」では回答数は少ないが、80%に近い。「水の科学」では70%。これが通常の総合科目における特徴です。これに反して「生物資源論」は、農学部の先生方が初年次から専門に興味を持ってもらう目的で開設された科目なので、「内容に関心がある」というよりは、むしろガイダンスで指導された聴講であることを示しています。文系科目では、受講理由は全く同じパターンで、「内容に関心がある」が圧倒的に多い。ただし、難しいかどうかになりますと話が変わってきます。難易性は、これは主に自然系ですが、「受講は非常に困難」で、ただし「十分理解できた」も多い。従って、かなり興味を持って聴いたということがうかがわれます。結局、「履修して良かった」は30～50%で、どこに標準を置くかによりますが、先生方も講義して良かった、学生側も聴いて良かったというところではないでしょうか。

文科系の総合科目については、「受講困難」が非常に高くなっています。ただし、「現代マスコミ論」では「受講困難である」が非常に低い。これはやはり内容によると思います。「十分理解できた」が多い。受講が困難であって、しかも十分理解できなかったというのもあるわけですし、自然系の方は皆がんばって「十分理解できた」もかなり高くなっています。しかし、それは授業の内容や勉強の仕方によることは言うまでもありません。

困難理由については「程度が高すぎる」が特徴です。自然系では「程度が高すぎる」と「知識が不足して」が多く、「勉強不足」は少ない。「知識不足」はあまりない。また、「聴いてみて講義の内容に興味を持てなかった」がかなり多い。それは、講義内容が学生の期待に反していたと解釈すべきでしょうが、高校卒の程度では想像もつかないような内容を先生方がお話になることは当然あり得ることです。「程度が高い」と「興味を追いつかなかった」という理由を考えますと、7年度以降の授業改善で検討されている総合科目の中のアドバンストコースのレベルに相当するのではなかったかという気がいたします。

4. 学生の理系離れについて

ここでの話は、一般教育科目3系列、特に自然科学系列の科目について、いわゆる「理系離れ」があるかを、文献 [1] のデータから考えてみることです。

分析の対象は人文学部、法学部、理学部、工学部の学生です。新潟大学には他に5学部がありますが、文系と理系の代表としてこれら4つの学部を選びました。

4. 1. 有意義分野

「有意義分野」についての質問した結果が図1です。

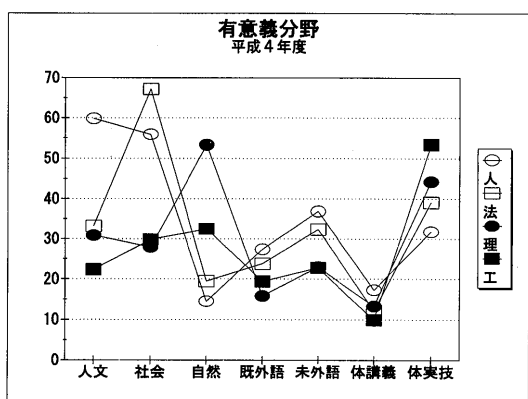


図 1

〇が人文学部、□が法学部、●が理学部、■が工学部を表しています。

この結果を見ますと、学部によって大きな違いがあることが分かります。

人文学部の学生は人文系列に対して60%位「有意義」と答えています。社会系列についても55~56%の値を示しています。それに対して自然系は20%を割っています。ですから、人文学部の学生は人文、社会系列に関しては「有意義」と過半数は思っていますが、自然系については15%位しかいないということです。

法学部は特徴的です。人文系列を「有意義」と思っている学生は比較的少なく、30数%です。それに対して社会系列は67~68%。そして、自然系列は20%を割っています。ですから法学部の学生は社会系列だけを有意義とっていて、他の系列は余り有意義だと思っていないわけです。

これに対して、理系では多くの学生が自然系列を「有意義」と回答すると推測されます。理学部を見ますと確かにその通りになってます。ところが、工学部では

それ程大きな違いはありません。工学部でも自然系列が「有意義」という回答が1位ですが、それ程多くはありません。これに比べると理学部は理系志向が強く表れています。しかしその度合いは、文系学生の文系志向と比べれば低くなっています。

4. 2. 困難度

次に、各系列の「困難度」を見てみます。

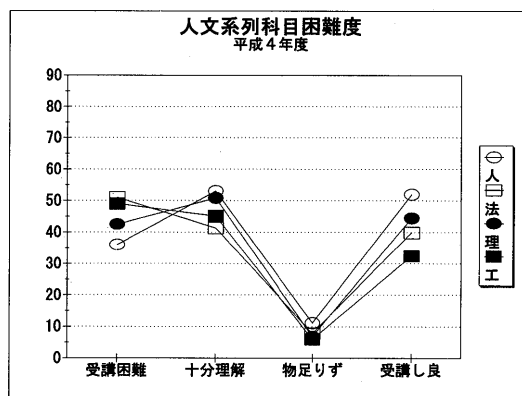


図 2

人文系列の「困難度」(図2)では、「受講困難」は学部によって少し違いがありますが、全体的には余り大きくありません。「物足りず」は殆どありません。

社会系列の「困難度」は人文系列と比べて少し易しい傾向ですが、分布の形はよく似ています。

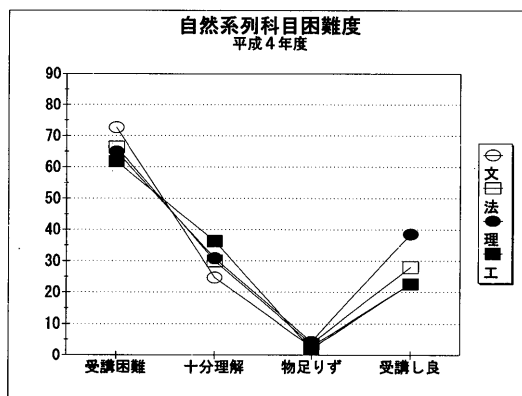


図 3

これに対し自然系列の結果(図3)を見ますと、人文系列、社会系列と比べてかなり多くの学生が難しいと答え、しかも、その割合は、どの学部もほぼ同じで、皆難しいと回答しています。

4. 3. 困難理由

次に、「困難理由」を見てみます。人文系列(図4)の科目を難しいと答えた理由は、全体的に色々です。

(「高度過ぎる」、「知識不足」、「勉強不足」、「単位取得」、

「興味なし」がほぼ同率)、社会系列についても大体同様です。

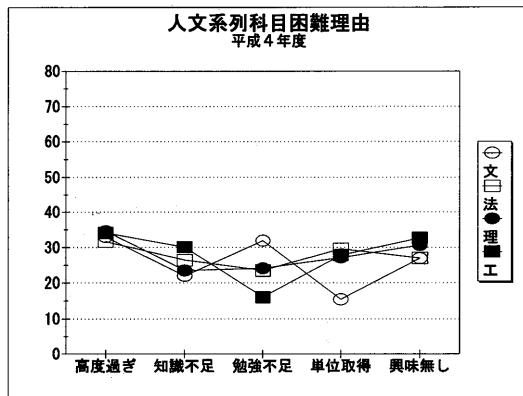


図 4

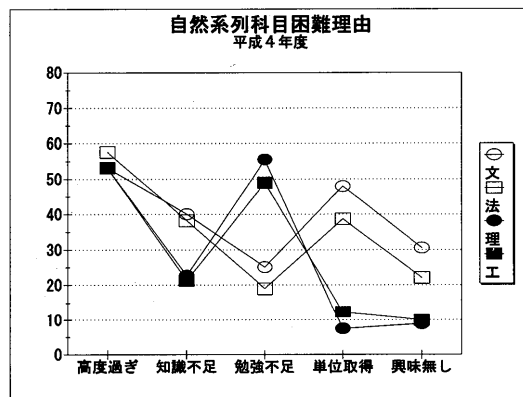


図 5

それに対して、自然系列 (図5) では全体の形が違っただけでなく、文系・理系による違いもかなりあります。「高度過ぎる」というのはどの学部でも大きな割合ですが、それに続く理由として、理系の学生は「勉強不足」を上げています。一方、文系の学生は「単位取得」を上げ、「興味がない」も少なくありません。全体として文系の学生は単位のためにやむなく受講したので、難しかった。つまり、勉強不足と言うよりは始めから勉強する気がなかったと答えています。

4. 4. 受講理由

次に、受講理由を見てみます。人文系列 (図6) も社会系列も似ていますが、社会系列では法学部の学生の「専門で必要」というのが目立ちます。法学部の学生は専門意識がかなり強いということでしょう。

全体的には「教養として必要」、「内容に関心がある」、「アドバイス」など教養的な内容を重要視しています。

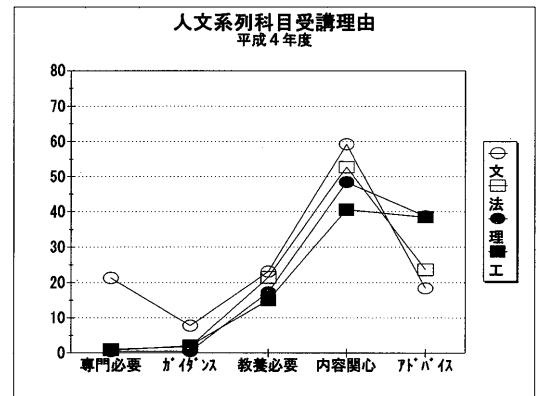


図 6

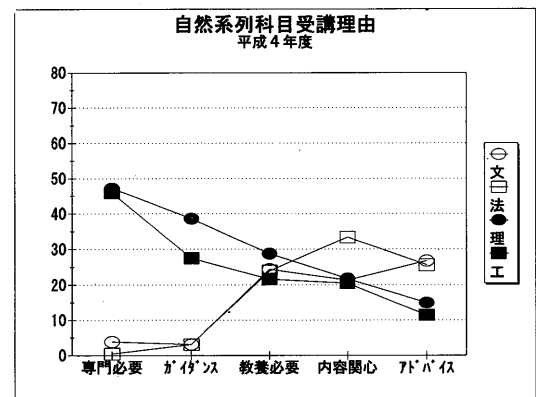


図 7

これに対して自然系列の科目 (図7) については、かなり違います。文系の学生は、全体的には人文・社会系列と似た形にですが、理系の学生はそれと異なり、「専門で必要である」、「ガイダンス」など、専門の基礎と考えていて、「教養として必要」、「内容に関心がある」とかはそれほど関係なく聴講しています。

4. 5. 自然系科目

上で見ましたように、自然系列の方が一般的に難しいと考えられています。しかし、難しいと言っても、科目によってかなり違いがあります。

数学の「困難度」 (図8) を見ますと、理学部の学生さえが80数%が「分からない」と回答しています。ところが、「困難で分からない」にもかかわらず「履修して良かった」という回答が4割近い。これは、先程の受講理由を考え合わせると、専門基礎として聴講しているので、難しくても、分からなくても「授業を聴いて、ある程度のことを勉強した」ということが良いと考えているわけです。

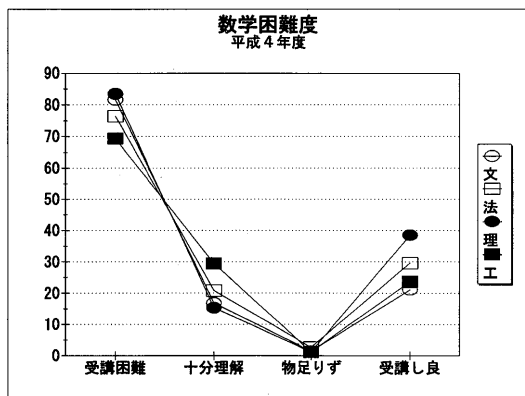


図 8

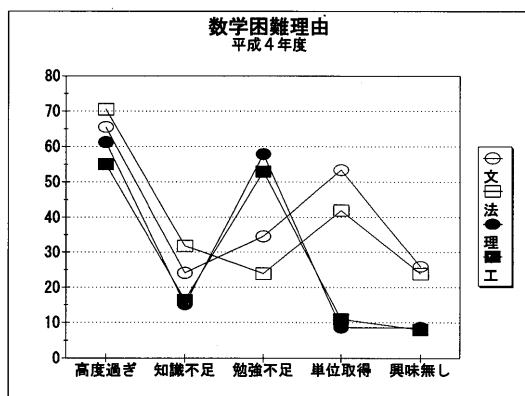


図 9

「困難理由」(図9)も自然系列全体の傾向が強調されて典型的に現れています。理系の学生は「難しく勉強不足」の回答が多く、文系の学生は「難しく、単位取得のためだから」という回答が多くなっています。数学が自然系列の科目の最も極端な形を現しています。

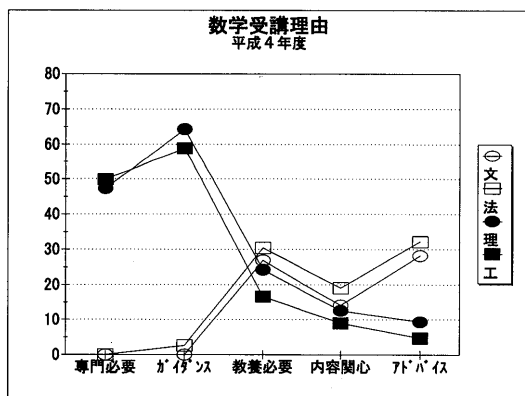


図 10

「受講理由」(図10)も、理系は「専門が必要」もしくは「ガイダンス」がというもので、「教養で必要」は少なくなっています。それに対して、文系の学生は「内容に関心」が少なく、「アドバイス」が意外と多い。「ア

ドバイス」は、この当時では自然系列から2科目聴講することになっていましたから、「授業は難しいが単位は易しい」というアドバイスのことと思われます。

自然系列の他の科目について見ますと物理、化学、生物、地学の順に徐々に形が変わってきます。

物理は似た形ですが、「困難理由」は文系の学生の「知識不足」が増え、少し違います。「受講理由」でも工学部の学生は物理の方を数学より専門で必要だと思っているようで、理学部と少しニュアンスが違ってきます。

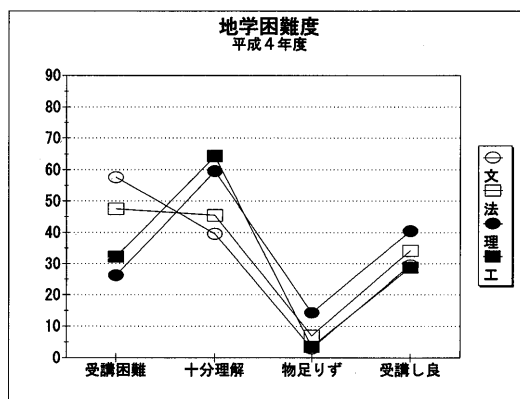


図 11

数学、物理は自然系列の代表という感じですが、化学もそれに似ています。生物になりますと少し状況が変わります。理学部の学生について見ますと、数学、物理、化学までは「受講困難」、「十分理解」の順になりますが、生物になるとこれが逆転して「十分理解」がかなり高くなっています。困難理由についても、「高度過ぎ」もありますが、「知識不足」がかなり大きな割合になります。そして「勉強不足」がかなり曖昧になります。受講理由も少しずつ変わってきます。「内容に関心」というタイプがかなり多くなります。このように生物は自然系列の中でも数学、物理とは違うと言えます。

地学になりますともっと違います。グラフの形を見ても分かるように、地学は自然系列平均とはかなり違った傾向をしています。「困難度」(図11)を見ると、理系の学生にとって地学は易しい、文系の学生にとってもそう難しいものでもないということです。

「困難理由」(図12)も違います。「勉強不足」だとは思わないというのが特徴です。理由は「単位取得」か「知識不足」が主なものです。

「受講理由」(図13)は、理系での基礎科目というこ

とがなくなる事で、「専門で必要」、「ガイダンス」が少なくなります。全体として「内容関心」が受講理由の主なものになります。

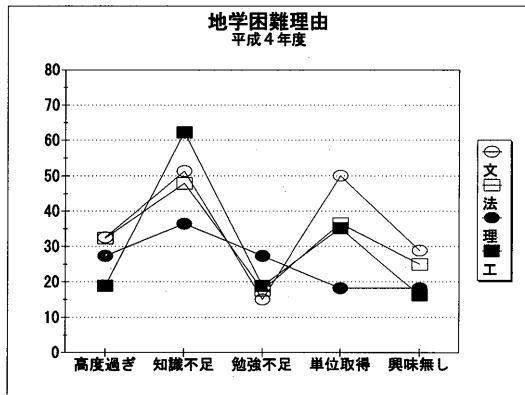


図 12

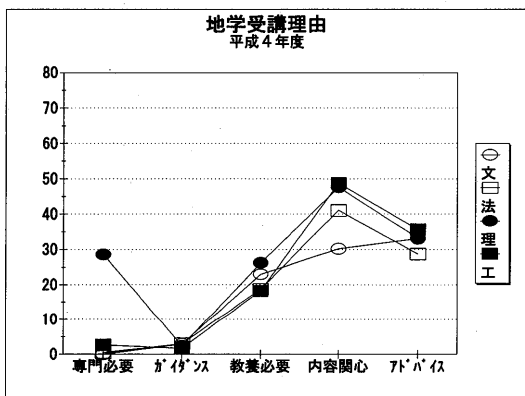


図 13

4. 6. 理系離れについてのまとめ

一般的に自然系列は人文・社会系列に比べてかなり難しいということが言えます。しかし、科目によればばらつきがあります。数学、物理は共に非常に難しいわけですが、地学になるとそれほどではありません。難しかった場合その理由は、「難しすぎる、高度過ぎる」という事柄は全部に共通しています。それ以外に文系の学生は「単位取得」とか「興味がない」という「もともとやる気がなかった」ことを理由に上げています。それに対して理系では、主に「勉強不足」と答えています。

受講理由も理系と文系で全然違います。理系では「専門で必要」や「ガイダンス」と回答し、「興味」や「内容に関心ある」ではなく、殆ど専門基礎として聴講しています。それに対して文系は専門基礎でないことから、残りの理由になりますが、回答率が低いというこ

とに注意すると、積極的な理由というよりは、「2科目必修だから、面白そうなもの、易しそうなものを聴講した」という回答をしていると思われます。

これが各具体的な科目を見た時の話ですが、これに対して総論的、建前的に見たものが一番最初に上げました有意義分野についての結果です。

少し大げさな言い方をします。人文・法学部の多くの学生は、自然系列科目を有意義とも、面白いとも思っていない。興味を持っている学生は余り多くありません。そして非常に難しいと考えています。そして必修単位だから仕方なく受講しているという意識です。興味のないものを単位のために受講しているわけですから、面白いわけもなく、勉強する気もなく、益々難しくなるということです。実は自然系列の科目は取りたくないというわけです。ですから、理系離れというよりは、理系の方には向きたくないという感じです。

これに対し理系の学生は、「とにかく専門基礎として聴講しなければならない」と考えています。専門の一部と思って受講しています。そうしますと、「難しくてもこれは仕方がない」、「単位が取れば良い」ということになり、また、「難しくても分らないのは勉強不足」と「ある程度自分の責任」にすることになります。逆に言えば、これは自分の専門だから「難しくても勉強すればできる」という意識の表れと思われる。

これが平成4年度の入学学生の意識です。平成5年度から新しいカリキュラムになり、教養科目の選択がかなり自由になりました。そこで最後に、その結果どうなるかを考えてみます。

文系、理系、学生とも、少なくとも教養科目としての自然系列科目は必要ないと言う雰囲気です。このままの状況で自由選択制にすれば、実は自由選択制にかなりなったわけですが、文系学生は「自然系の科目は、履修するとすれば、面白くて易しいもの、そうでなければ取らない」ということになります。その結果「文系の学生の自然系科目の履修は大幅に減る」ということが容易に想像できます。

一方、理系学生の理系科目の聴講は減るかというところでもありません。教養の単位として認められれば、自分の専門に役立つような自然系科目の履修は増やすでしょう。実際、理学部の学生はそういう面で履修

が増えていると思われます。

実はこのことの答えは一部分既に出ています。平成4年度と5年度の自然系列科目の聴講状況を人文学部と法学部について纏めたのが、下表です。平成5年度から科目の分類が変わったり、半期科目や総合科目が増えていますから、一概に比較することは出来ませんが、大雑把な目安ということでご覧下さい。

自然科学系列人文・法学聴講学生数

| 年度 | 数 学 | | 物 理 | | 生 物 | | 地 学 | |
|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| | 人文 | 法学 | 人文 | 法学 | 人文 | 法学 | 人文 | 法学 |
| 4 | 102 | 189 | 54 | 53 | 132 | 169 | 206 | 300 |
| 5 | 28 | 15 | 11 | 12 | 72 | 29 | 145 | 82 |

数学については平成4年度には人文学部の学生が102人取っていますが、平成5年度は28人です。法学部は189人が15人になりました。殆ど0に近く、誤差範囲です。物理もそうです。先程も言いましたが、生物系から段々易しくなっていることもあって、少しは残っていますが、いずれにしても激減です。

人文、法学部で新潟大学の全てを占めているわけはありませんし、一方で理学部、工学部の学生の自然系列の科目の履修が増えていますので、自然系列の全学部全体の聴講数を見ますと、そんなに激減した様にはなっていません。しかし中を見ると、聴講傾向は非常に大きく変化したということです。

このことの是非については色々議論のあるところですが、カリキュラム改革の結果として注意をしておく必要があります。

5. ドイツ語教育における諸問題

お手元の<資料2>を見ていただきたいと思えます。これが「一般教育改善のための新潟大学教養部における調査研究報告書」です〔以下では<資料>と略記(参考文献の1)に該当〕。私は、今回の話題提供におきましては「ドイツ語〔未修外国語〕」のアンケート・データを中心とし報告をさせていただきたいと思えます。今日は吉村センター長から話題提供の依頼がありましたが、全て説明するだけの時間の余裕がありませんので、御関心のある先生方にはもう一度後ほどあらためて全体の報告書に目を通していただきたいと思いま

す。本日の発表要旨はレジメにも記してありますので適宜ご覧下さい。それでは、先に紹介しました「調査報告書」のデータにもとづきまして、数値を読み取る上で私なりに気づいた点をいくつか指摘してみたいと思います。始めにお手元の<資料>にあります次の表をご覧ください。

有意義と思った分野（年度別）（％）

| 授業年度 | 平成2年 | 平成3年 | 平成4年 |
|---------|------|------|------|
| 人 文 系 | 33.5 | 30.6 | 31.2 |
| 社 会 系 | 30.1 | 35.0 | 40.0 |
| 自 然 系 | 29.1 | 26.9 | 25.4 |
| 既修外国語 | 21.2 | 20.7 | 21.3 |
| 未修外国語 | 20.5 | 19.4 | 28.8 |
| 体 育 実 技 | 42.0 | 41.6 | 44.8 |

これは学生が「外国語科目」の中で有意義と思った分野についての区分です。これは各系列の科目の中で未修外国語つまりドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語が該当します。学生が有意義と思った度合いについては、これはほぼ2割から2割5分というところが読み取れます。これは既修外国語つまり英語に対する有意義度とほぼ大差がないということになります。ドイツ語の授業を担当している筆者の立場から見ると、次の二点が目立ちました。

- (1) 他系列の科目に比べると「外国語」総体として約10パーセント下回ること、
- (2) 「既修外国語〔英語〕」と「未修外国語」と比較した場合、数値にそれほど目立った形での開きが見られなかったこと。

(1)に関しては、「外国語」が専門教育と直接的に係わっている学部が少ないことから致し方ないことだと思えますが、(2)に関しては、既に蓄積された知識を有する「英語」の授業と他の外国語の授業と比較して、同程度の「有意義さの度合い」を持つということが、英語の方が度合いが高いだろうという筆者の予想は完全にくつがえしております。この同程度の「有意義さ」ということが、そのまま未修外国語の教官の授業努力の成果と見るべきか。かと言って英語の教官の授業努力の怠慢という形では決めつけられないのかも知れません。とはいえ、ほとんどゼロからの出発とも言える未修

外国語が、それ相応に学生に評価されているということは注目してよいかと思われます。この有意義度からみて、少なくとも未修外国語に携わる先生方は相当程度授業内容に対する努力をしているのではないかと、比較的好意的な読みは可能だろうと思われま

す。つぎに<資料>の43ページに移ります。これは有意義度に関して先程のように理系と文系に分けた、大雑把に分けた場合の有意義度の違いになりますけれども、ある程度が常識的に予想できることですが、人文・法学部の方がですね、未修外国語に対する有意義度、平成4年度において、34%、理学部・工学部の方が23%ということで、ある程度文系の外国語科目に対するモチベーションと言いますか、動機が比較的高いということはこの数字が現しているだろうと思います。

有意義と思った分野（理系・文系別）（%）

| 平成4年度 | 人文・法学 | 理学・工学 | 全 体 |
|-------|-------|-------|------|
| 人 文 系 | 44.1 | 24.9 | 31.2 |
| 社 会 系 | 62.5 | 29.3 | 40.0 |
| 自 然 系 | 17.5 | 38.8 | 25.4 |
| 既修外国語 | 25.3 | 18.3 | 21.3 |
| 未修外国語 | 34.3 | 22.9 | 28.8 |
| 体育実技 | 36.1 | 50.6 | 44.8 |

次に、<資料>44ページの表は、ドイツ語に関する「難易性関連項目」の表ですが、これに関しては「履修して良かった」という、いわば学習者の達成度ですね、アチーブメントと言いますが、2割5分～3割、平均しても3割には達していないという現状が一つあると思います。これはさらに個々の未修外国語によって相当程度ばらつきがあるということが一つ注目しておかなければならないと思います。

ドイツ語に関する「難易性関連項目」（%）

| 授業年度 | 平成2年 | 平成3年 | 平成4年 |
|------------|------|------|------|
| 受講して困難を感じた | 58.4 | 59.0 | 60.1 |
| 十分理解できた | 38.9 | 38.2 | 38.6 |
| 物足りなかった | 2.7 | 2.8 | 1.3 |
| 履修して良かった | 24.4 | 29.7 | 32.9 |

説明が前後しましたけれども、<資料>の43ページの下から44ページの上にかけてですが、各未修外国語の「履修して良かった」という数値について考えてみますと、比較的ロシア語・中国語の度合いがドイツ語・フランス語といった西洋系言語に比べると高い点を注目して良いような気がします。「環日本海」という言葉が、はたして一過性の流行語か、あるいは寿命の長い文化的、歴史的概念があるか分かりませんが、新潟大学に入って来る学生の関心というのは相当程度ロシア語・中国語にあるのではないかと予想させるわけでして、もし学生の知的需要になかった外国語のメニューを提供するということが可能であるとすれば、予測としては中国語、ロシア語あるいは朝鮮語といった外国語の比重が相対的に高くなっていくだろうと言えます。

あとは順番に資料をこのまま読んでいただければ大体は傾向を把握していただけるかとは思いますが、もう一つ最後に51ページの「受講理由」ですね、これに関してちょっと一言付け加えさせていただきます。51ページの下の方の表はドイツ語を受講した理由の各学部ごとの3年間の平均値ということで、大づかみな数字ですが、これはいわゆるドイツ語が必要かどうかという議論をする前に少し考えてみたいことがあります。たとえば「専門で必要なのだ」と判断する学生が人文、法学、医学部において、2割以上ということで目立っているわけですが、この場合に学生の思い込みとして医学部の学生はドイツ語を取らなければダメだと言ったようなことが多少は働いているのでしょうか。それとも学部の先生方のドイツ語に対するノスタルジア〔郷愁〕も影響しているのでしょうか。

現実的には先程話がありましたように、実用性という観点からいきますとドイツ語そのものはうまく専門領域とはさほど関連性は以前ほど無いと言いますか、極端な言い方をすれば歴史的使命を終えたのかもしれない。学部のガイダンスでは多分二つの理由があると思います。まず、学部のガイダンスというのは専門分野と関わりがあるという積極的な理由で受講を進めるか、あるいは、ドイツ語ぐらいは取っておいた方がいいんじゃないかと、専門領域との整合性が見えないままに、せっかく大学に入って来たのだから二科目ぐ

らの外国語は取っておいてほしいというレベルでのガイダンスということです。

いずれにしましても、ドイツ語そのものがそれぞれの学部の領域と研究あるいは学問上の相互関連性があり見えなくなって来ている時代ですから、このガイダンスの内容というのは積極的な理由づけにはなっていないように思われます。

また「基礎教養として必要」という場合も二つの読みが可能であります。純粹に「基礎教養として必要」だというふうに教員の方も思っていて、かつ学生も思っているのか、基礎教養とは必修単位の片一方で、義務的な意味で必要と言っているのか、この読みが二つになっていて、私には判断しかねました。ただ、二重の意味があるに違いないということは報告させていただきます。それから「内容に関心あり」というものは、ほぼ予備知識ゼロのままです学生は入学して、それぞれ英語以外の外国語を二つずつぐらい持つわけですけども、これも人文、教育で2割以上の関心を持っているが目立つ程度で、ほぼおしなべて10%ぐらいですね、さほど関心そのものないという前提に立って当たり前なのかもしれませんし、教える側としては学生の「モチベーションの問題」つまり学習の動機付けについて真剣に工夫する必要があるということもこの数字から言えることだと思います。

ドイツ語の「受講理由」の
各学部ごとの3年間の平均値(%)

| 学部 | 専門で必要 | 学部のガイダンス | 基礎教養として必要 | 内容に関心あり | 先輩のアドバイス |
|------|-------|----------|-----------|---------|----------|
| 人文教育 | 27.5 | 19.1 | 38.7 | 24.9 | 17.4 |
| 法学 | 5.4 | 36.4 | 22.6 | 21.7 | 24.7 |
| 経済学 | 22.8 | 29.0 | 30.7 | 15.1 | 16.9 |
| 理学 | 6.1 | 31.9 | 28.7 | 12.4 | 17.5 |
| 医学 | 9.5 | 32.7 | 30.6 | 10.6 | 20.5 |
| 歯学 | 20.0 | 40.8 | 34.9 | 15.4 | 24.6 |
| 工学 | 16.9 | 50.1 | 21.0 | 11.8 | 20.5 |
| 農学 | 7.8 | 30.1 | 26.9 | 11.1 | 22.5 |
| | 9.3 | 27.4 | 29.4 | 12.8 | 23.0 |

数字に関する説明は以上でありまして、細かい読みに関しては<資料>を読んでもらいたいです。時間が超過しておりますので、細かい点は省かせ

ていただきます。全体の教育の中で外国語、とりわけ社会的な需要と関連性の無い部分でいわゆる第2外国語というものが教養科目の中でどういうふうに位置付けられて行くか、他の専門科目とどういうふうに連動性を持たせて行くかとても大きな課題を残したままであるということ、これは教養部時代も解決できませんでしたし、これからも時間をかけて解決しなければならない点なんだろうと思いますが、いずれにせよ、我々、現場でドイツ語教育を担当してきた人間としては、相当様々な課題を通して来たり、自分達なりに課題解決の努力はして来た人もいます。

ただ、その課題は先程も言いましたように未解決であって、より具体的効果的な方途を見出せないままに教養部は消滅しました。今後は、大学教育開発研究センターのワーキンググループの一部で、言うまでもありませんが、外国語教育に関してその有効性を見出すべき議論に関しては、ただ単に語学を担当する教官のみならず、それぞれの学部でさまざまな専門領域に従事していらして先生方に教育の改革に関し大いに引き続いて関心を持っていただきたいと思います。さらに、その意見交流の中でいっそう議論を深めて行きたいものです。

いずれにしましても「教養部」という言葉は確かに死語になってしまいましたが、教養教育と言う言葉はまだ死語になっていません。これから新しい制度の枠組みの中で、新たに意味づけがなされて行くかもしれませんし、私も語学教育の立場から今まで以上に教養教育の中身について自分なりに皆さんといっしょに真剣に考えてみたいと思っております。簡単ですが以上で報告を終わります。

6. おわりに

新潟大学では組織改革により教養部という部局は消滅し、教養教育については新たに発足した大学教育開発研究センターを中心として全学的に担当する体制が整えられました。教養科目の単位数を30単位に減らし、系列別の必修枠を撤廃するなど、制度も学生が履修し易いように改められました。7年度ではさらに総合科目の開講数を大幅に増やす方向で検討されています。私達のアンケート調査の結果がこれからの教養教育改

善の一助になれば幸いです。

参考文献

- [1] 一般教育改善のための新潟大学教養部における調査研究報告書、一般教育方法等改善4大学共

同研究プロジェクト新潟大学教養部研究チーム、平成6年3月

- [2] 「大学設置基準大綱化のもとでの一般教育の方法とその改善に関する基本的調査」に関する報告書、4大学教育方法等改善プロジェクト、平成6年3月

教養科目履修の 医学部学生への アンケート調査

医学部 車田正男

医学部ではこの10数年間、医学教育に関するアンケート調査を6年次学生を対象に行ってきた。この調査の主旨は、医学教育の改善を図るため医学部カリキュラム検討委員会および学務委員会等における教育内容の見直し等の検討をするためである。具体的には質問に対し、回答を複数示し該当すると思われる回答を選択するあるいは文章で回答するというものである(以下参照)。

今回開催された第1回ワークショップのテーマである「平成5年度教養科目履修学生のアンケート」に答える学生は医学部の2年次学生であり、医学部ではこの2年次学生からは上述のような詳細なアンケート調査は施行していない。しかし、過日、提出要請のあった各学部における「教養科目のあり方等について」の

答申を医学部でまとめる際その資料とすべく、2年次学生に教養教育におけるさまざまな感想等についてのアンケート調査を行った。

まず昨年度の6年次学生に対するアンケート調査の特に教養教育に関する結果について触れたい。

(1) 医学教育における進学課程(つまり教養部教育)の意味について学生がどのように考えているかについては、「人間形成のための一般教養を身に付ける期間」および「クラブ、同好会等自分で自由な活動を行う期間」というような答えが最も多く、「将来の自分の進む方向、生き方を模索する期間」、「受験後の骨休みの期間」がそれに続く。われわれが最も関心を持っている「専門教育の前提となるべき医学の基礎的な学力を身に付ける期間」という答えが非常にすくなかったのは驚きである。

(2) 今後の進学課程の望ましい方向についてどのように考えるかについては、「専門教育に結び付く基礎的科目を充実すべきである」および「進学課程は廃止し6年一貫教育体制とし、その中に必要な一般教育科目を組み入れるべきである」が最も多く、ついで「進学課程における一般教養科目をさらに充実させ有意義なものにすべきである」、「進学課程に専門教育科目をある程度入れるべきである」、「履修科目数を減少させ学生が自由に活動できる時間を増やすべきである」等がこれに続く。

(3) 現在の進学課程を充実させるためにどのようなことを希望するかについては、「特に外国語科目などの教養関連科目を充実させる」が最も多く、「魅力ある講義を実施する」、「マスプロ教育でなく、ゼミナール等の少人数の教育を増やして欲しい」が続き、「暗記主義的な方向に追いやる過密カリキュラムを解消する」、「教官、施設を含む教養部教育体制を充実させる」が続く。